

平成二十七年 度 修 士 論 文 要 旨

段階動詞と副詞的修飾成分との共起関係についての研究

—「V1つづける」を中心に—

王 丹 彤

1. 研究目的

本研究の目的はアスペクチュアリティの各表現手段、各アスペクト的な意味を視野に入れ、統語論的な研究において、修飾成分と修飾される述語成分との共起関係という視点から、アスペクト的な意味機能を記述することにある。

アスペクチュアリティとは、時間的限定性のある動的事象の時間の展開における様々な姿を表し分けるカテゴリーである。言い換えれば、アスペクチュアリティは文における様々なアスペクト的な意味と、様々な表現手段との体系である。戦後のアスペクト研究は主に形態論的に、動詞や述語を中心に進んでいる。アスペクト標示に関して形態論的カテゴリー、語形変化がない言語もあるが、語彙的、語順など様々な表現手段によって表現される文レベルでのアスペクチュアリティはどの言語にもある。つまり、形態論的手段ではなく、ほかのアスペクト的な表現手段に関する

研究はアスペクチュアリティ研究にとって意義があり、さらには、出来事の時間的展開の本質的な特徴が窺え、諸言語間の対照研究にとつても価値がある。本研究は、語彙的なアスペクト表現手段に属する「V1+つづける」を中心に、段階動詞と副詞的修飾成分との共起関係から、アスペクト的な意味機能をより明らかにすることをめざした。

2. 論文構成

本研究は、一～六章によって構成されているが、中心は第四章「段階動詞と副詞的修飾成分」と第五章「段階動詞と時の表現との共起関係」である。詳細は以下のとおりである。

- 第一章 本研究の目的及び構成
- 第二章 先行研究のまとめと、本研究の位置づけ
- 第三章 研究方法及びデータの構成
- 第四章 「V1+つづける」と副詞的修飾成分との共起

関係の考察および、「〜ている」形式との対照

第五章 「V1+つづける」と時の表現との共起関係の

考察および、「〜ている」形式との対照

第六章 結論と今後の課題

3. 研究方法

本研究は先行研究を踏まえ、「V1+つづける」を中心に段階動詞と副詞的修飾成分との共起関係を考察するため、『現代日本語書き言葉均衡コーパス(中納言)』を利用して用例を収集した。元データは、「V1+つづける」に関するデータ一七八八文(「短単位検索」で動詞の連用形を前方共起条件に設定し、「ツヅケル」を検索のキーとして検索)と「V1+つづける」と類似性を持ち、対照項目と見なす「〜ている」形式に関わるデータ一八〇〇文(「文字列検索」でそれぞれ「ている」「ています」「ていた」「ていました」を検索のキーとして検索)が含まれる。そして、仁田義雄(二〇〇二)で規定されている副詞分類により、収集した用例の中から関連する構文成分を抽出し、分類整理した。

4. 研究成果

本研究の分析考察はデータベースの整理結果に基づき、共起関係の傾向や形成原因を分析し、アスペクト的な意味機能を考察した。結論としては、以下のとおりである。

①「V1+つづける」は明らかに事象を表す前項V1と、

時間を表す後項ツヅケルから構成される。つまり、一方は内部の前後二項がある程度分化し、もう一方は、語彙の意味に制限を受け、結合条件がある。そこで、「V1+つづける」と副詞的修飾成分との共起関係は、 \wedge 様態 \vee (ゆっくり、えんえん)と \wedge 時間 \vee (ずっと、次々)に集中し、ほぼ平等に分化し、V1になりにくい動詞と相性がいい「程度量の副詞」(とても、非常に)、「結果の副詞」(赤く、丈夫に)とは共起しにくい。一方、「〜ている」形式は文法的意味のみを持ち、内部が分化せず、結合制限もおよそなので、 \wedge 様態 \vee 以外の副詞との共起はほとんど差がなく、一樣である。

②ツヅケルは「V1+つづける」の後項動詞として、一方は \wedge 限界消去 \vee という機能を持ち、もう一方は事象が持続中の段階に限定する。そこで、「V1+つづける」と時間関係の副詞との共起関係は限界性と相関するタイプ「事態存続の時間量」、「時間における事態の進展」を表す副詞(ex. ずっと、しばらく)に偏り、出来事と異なる \wedge 想定事態 \vee を必要とする「マダ・モウ」との共起関係が弱い。それに対して、「〜ている」形式は「マダ・モウ」と共起しやすい。

③「V1+つづける」は語彙的アスペクト表現手段として、外的時間との相関性が弱く、形態論的手段に頼る。ゆえに、外的時間を表すテンポラリティ表現としての時の状

況成分における共起関係は、出来事時を指示する相対的なもの（その時、翌日）に偏り、発話時を基準とするものと共起関係が弱い。一方、「〜ている」形式はテキスト機能を持ち、外的時間と相関する。継続相として、発話活動、発話時を基準にするテンポラリティ表現（今、最近）と共起しやすい。

④ 時の表現において、「V1+つづける」、「〜ている」との共起関係は、時の状況成分における傾向と形成原因と類似している。二つの表現と \wedge 内的時間 \vee 、 \wedge 外的時間 \vee との相関性の差異により、「V1+つづける」の方は内的時間を表す「時間関係の副詞」と共起しやすく、「〜ている」の方は外的時間を表す「時の状況成分」と共起しやすい。

⑤ 期間表現において、「V1+つづける」との共起関係は、「事態存続の時間量」を表す副詞との共起と類似している。すなわち、非内的限界である「V1+つづける」の表現に外から限界を設け、限定することであり、「V1+つづける」と相性がよく、共起しやすい。